

# 課題名：持続可能で適応力のある茶産地づくり ～認証取得とデータ駆動で信頼と所得向上を実現した川薩地域の挑戦～

所属名：北薩地域振興局農政普及課さつま町駐在

## <活動事例の要旨>

高級茶産地である川薩地域の特徴を維持向上しつつ、国内外の茶業情勢や生産・販売環境の変化に柔軟に対応し、信頼と所得向上の仕組みづくりに取り組んだ。

### 1 活動の課題・目標と策定過程

#### (1) 課題・目標と設定理由

近年、リーフ茶の需要が減少する一方、安心・安全へのニーズは増大し、輸出先やドリンク市場では、有機 JAS や国際水準 GAP などの第三者認証が求められている。また、資材高騰や担い手不足が進む中、スマート・データ駆動型農業による効率的で収益力の高い経営が求められている。川薩地域は高級茶生産を強みとして発展した産地であり、これまでの技術蓄積を基盤として、データ活用や各種認証の取得を組み合わせ、所得向上を実現する新たな仕組みを構築できると考えた。

そこで、若い担い手を対象に、自工場での出品茶製造や荒茶審査技術の高度化を支援し高級茶生産技術の高位平準化を図るとともに、輸出やドリンク市場を見据えた生産体制構築に向けて、生産履歴等のデータやスマート技術の活用による収益性向上、認証取得等による信頼性向上を通じて、持続可能で儲かる茶業の実現を目標とした。

#### (2) 計画の策定過程

- ア 2018 年～：品評会・審査技術競技会への取組強化，スマート技術実証（調査研究）
- イ 2019 年～：データ活用のためのモデル茶園設置，普及指導員としてのデータ分析資質向上（統計検定 1 級取得），データ分析と現場での駆動（調査研究）
- ウ 2023 年～：有機栽培技術実証（調査研究），有機 JAS・国際水準 GAP 認証取得



### 2 普及指導活動の内容

#### (1) 活動の経過

- (ア) 2018 年から品評会・共進会出品や審査競技会の取組を強化し、茶園管理・適期摘採、自工場での出品茶製造、荒茶審査技術の指導により高級茶生産技術の高位平準化と継承を支援した。青年農業者の協力のもとモデル更新茶園を設置し、5 年間の茶市場データや生産履歴データ等の分析により「収入」に影響する肥培管理の探索や、茶工場で蒸し葉をスマホで撮影するスマート技術実証を調査研究した。
- (イ) 有機茶園での樹勢維持や病虫害対策のためカットバック技術導入を調査研究し、志向農家の有機 JAS 認証取得を支援した。青年農業者を対象に国際水準 GAP 取得支援会を定期的に開催し、審査対応を関係機関と支援した。また、その活動を青

年プロジェクトとしてまとめ、発表支援をするとともに青年農業士に誘導した。

(2) 指導・支援の体制

(ア) 生産者組織：薩摩川内市茶業振興会、さつま町茶生産協会、薩摩さみどり会

(イ) 関係機関：農政普及課内および各市町茶技連会による定期的な打ち合わせ

### 3 普及指導活動の成果

(1) 課題及び目標の達成状況とその要因

(ア) 自工場での出品茶製造や蒸葉撮影などのスマート技術を日々のお茶づくりに生かした結果、茶市場に出荷された荒茶の水色等の品質が高まり、単価は年々向上し、R7 一番茶単価は県平均を 16 ポイント上回り（図左）、管内産地間の共販額は高位平準化した。また、県茶品評会経営改善コンクールの部で産地賞・農林水産大臣賞を連続受賞し、茶業青年の会荒茶共進会でも県知事賞を連続受賞した。生産履歴データを分析し、更新茶園での一番茶収入には「芽数」が、品質には「被覆期間」が重要であることを明らかにし、これをもとに儲かる栽培管理指標を作成した。指標を実践した青年たちの R6 共販額は 22% 向上し、これらの活動をまとめた 2 人が共同で青年農業士を取得し、全国大会でプロジェクト発表を行った。

(イ) 有機茶園でのカットバックにより樹勢が維持され収量が確保された。有機 JAS 認証を推進し、令和 7 年度の認証面積は 52ha まで拡大し、有機認証茶園の収益は著しく向上した。また、新たに 6 戸が ASIAGAP 認証（その後 JGAP+SA）を取得し、令和 7 年度の認証面積は 95ha まで拡大した。認証取得工場の販売金額は二番茶以降、前年に比べて大幅に伸びた（図右）。

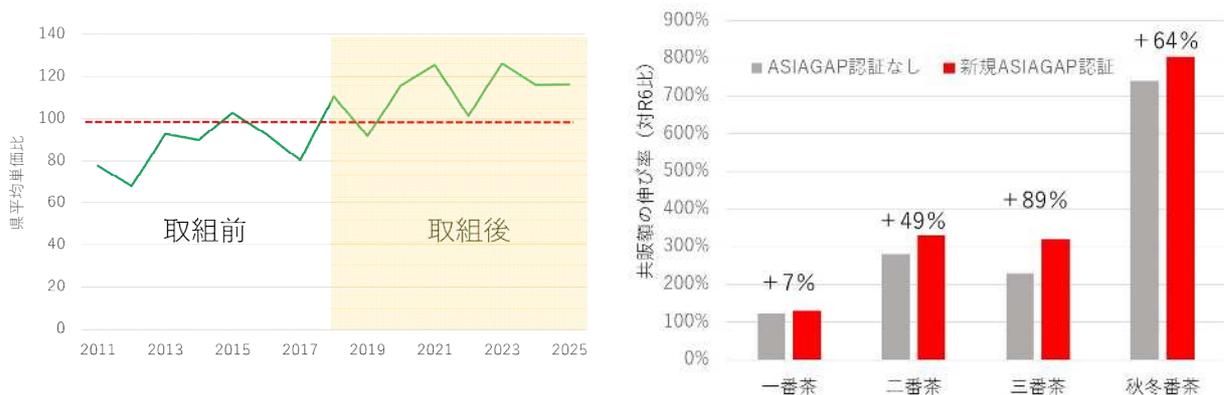


図. 出品茶取組前後の管内一番茶単価の県平均比の推移（左）と ASIAGAP の有無による R7 共販額の前年比伸び率（右）

(2) 活動に対する生産者・農家の評価

生産者、特に青年農業者から認証取得で生産の信頼性が向上し、生産現場でのデータ駆動が所得向上に繋がったと高い評価が得られた。

(3) 地域農業振興への貢献

高級茶生産や認証取得に取り組む意欲のある産地という評価が定着し、茶商からの「貴重な浅蒸し高級茶産地」としての期待が高まった。

### 4 今後の普及活動に向けて

(1) 今後の課題：有機 JAS 認証・国際水準 GAP 認証を活用した煎茶工場の再編やてん茶工場の新設、ほ場集約による生産や雇用の効率化が必要である。

(2) 今後の活用に向けて：令和 7 年度は荒茶価格が高騰し、生産流通の転換期となった。また、夏場の異常高温も顕著となった。このような生産・販売環境の劇的な変化に柔軟に対応する力が今後さらに求められる。